

養

(能)

ツレ 高野 秀幸

シテ 広島 克崇

老 ワキ 平木 豊男

ワキツレ 北島 公之

間 中尾 史生

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 河原 清
太鼓 徳田 宗久
笛 江野 泉

後見 渡邊荀之助
松田 若子

地謡

水口 純治 佐野 玄宜
山本 貢伸 藪 俊彦
大澤 永靖 渡邊 茂人
山崎 健 松本 博

休憩 二十分

野守

(連吟)

寺田 茂
中村 清
船本 嘉人
米島 和秋

節

分

(狂言)

鬼 炭 光太郎

女 清水 宗治
後見 炭 哲男

(能)

籠太鼓

シテ 高橋 右任

ワキ 北島 公之

間 能村 祐丞

大鼓 田中 一義
小鼓 住駒 幸英
笛 片岡憲太郎

後見 佐野 由於
福岡 聡子

地謡

谷 清士 佐野 弘宜
岩井 嘉樹 島村 明宏
笠間 啓 藪 克徳
田屋 邦夫 川島 英治

能養老 (ようろう)

美濃の国本巢もとすの郡に不思議な泉が発見されたのは雄略天皇の御代のことです。さつそく勅使(ワキ・ワキツレ)が派遣され、養老の泉のいわれを尋ねます。滝のほとりに現れた親子(前シテ・ツレ)は、この水を山仕事の帰りに息子が見つけ、老いた父母に与えて老いを養う薬とし、おかげで心清らかに齢も延びたと穏やかに語ります。親子は滝壺近くの霊泉に勅使を案内して、帝の治世を称え帝の寿命が尽きないよう薬の水を捧げることにします。水の奇瑞、酒の仙徳に思いをめぐらし、袖を濡らして水を汲む老人が、水鏡に映る姿の若やぎを喜んだ後、天上からは光と花と音楽が降り注ぎ、滝の響きも清澄さを増します(中入)。やがて男体の山の神(後シテ)が颯爽と影向し、神仏は御代を守り衆生を救うのだといって、諸天の来御に耳を澄ませ神舞を舞います。山の井の水は千年の松の緑を映し、滔々として尽きません。山の神は善き御代の万歳の栄えを祝福して帰ります。

狂言節分 (せつぶん)

節分の夜には鰯の頭を刺した柵の枝を門口に置き、鬼を打つ豆を撒きます。その豆を拾って噛もうと、遙々蓬萊の島から来た鬼が、女の家を覗き見て、したたかに柵で目を突きます。出てきた女に食べ物乞ううち、その美しさに心奪われ、蓬萊の島で流行る小歌を種々に聞かせては、女の気を引こうとしますが、相手にされず泣き出してしまいます。あげくは隠れ蓑・隠れ笠、打ち出の小槌まで騙し取られて、豆を撒かれて追ひ払われます。

能籠太鼓 (ろうだいこ)

九州松浦の何某(ワキ)が出て、他郷の者と口論し相手を殺害した科で家人の関の清次を牢者させてあると述べます。その清次が脱牢したので、何某は代わりに妻(シテ)を呼んで牢に籠め、清次の行方を糾します。牢には鼓を掛け、牢番に一刻ずつ時を打たせます。牢の妻が狂気すると聞いて何某がわけを問うと、妻は夫との別れや肩身の狭さ、牢にある不安から物に狂うのは当然と答えます。何某も妻の気持ちは理解して、夫の潜伏先を教えるなら、また妻の優しい物言いに免じて、牢から妻を出してやろうと提案しますが、妻は拒否し牢を形見と居座って、夫婦共に許すとの言質を取ります。牢を出た妻は時守の鼓を打ち、夫への思いを訴えて再び入牢、悲嘆に暮れる姿を見せて、何某から神かけて夫婦を許すとの確約を得ます。そこでようやく太宰府の知人のもとに潜むかと白状し、何某は親の十三回忌を理由に科を助け、妻は夫を捜し出して契りを復すという、偽りの物狂能です。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十年三月四日(日) 午後一時始

(能) 右近 (狂言) 磁石 (能) 八島